

三十六、一期一会

例年のごとく、本部の夏季講習会も、盛大に有意義に終りを上げた。事変のため、申し込みの二百名より五十人を減じたけれども、そのためにちようにいい人数であった。

このたびは、浄土の莊嚴の中、菩薩の莊嚴功德、すなわち、不動而至徳、一念遍至徳、無相供養徳、示法如仏徳の四種正修行について一週間講義し、曇鸞大師のみ教えを通してまことにありがたくも尊いみ法を頂戴した。初めて仏法を聞く人には少し無理であったかと思うが、まことに甚深微妙な世界の開頭であった。われらは、浄土の菩薩の生活を聞くことによつて、われらの念仏生活に豊かな内容を頂くとともに、沈痛な懺悔を与えられた。

われらは、このたびもまた大法の深さに、念仏の世界の広大さに、深い感銘を与えられた。

このたびの聖会には、遠きは満州台湾より十幾名の同胞を迎え、東は江州の同胞も初めて参会せられて、つくづく因縁の尊さありがたさを思わされたことであった。

因縁の無いかぎり、その隣に住むとも聞く気さえなく、因縁のあるかぎり、千里の海波を超えて、会うことができる。しこうして宿善の問題について深く留意せられたのは蓮如上人であった。

1

御文章三帖目第十二通には

「夫れ当流の他力信心の一通を勧めんと思はんには、まづ宿善、無宿善の機を沙汰すべし。さればいかに昔より当門徒にその名をかけたる人なりとも、無宿善の機は信心をとり難し、まことに宿善開発の機は、自ら信を決定すべし、されば無宿善の機の前に於ては正雑二行の沙汰をする時は^{かえ}卻りて誹謗の基となるべきなり。この宿善、無宿善の道理を分別せずして手広に世間の人をも憚らず勸化を致すこと、以ての外の当流の掟に相背けり」と。

かくまで宿善の問題を重大視される上人であった。これまったく大経に「若し人善本無くば、此の経を聞くことを得ず」とあり、また「もし此の経を聞いて信樂受持せんことは、難中之難、此の難に過ぎたる無し。」の御文によられたものである。

さればまた、

「一。蓮如上人仰せられ候。宿善めでたしと云ふはわろし、御一流には、宿善有り難しと申すがよく候。」「一。他宗には法にあひたるを宿善といふ。当流には信をとる事を宿善といふ。信心をうることを肝要なり。」(御一代聞書)
と仰せられるほど、宿善をありがたく思われた上人であった。

「噫。弘誓の強縁は多生にも値ひ亘く、真実の淨信は億劫にも獲亘し。遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」御開山聖人もまた、身にかけて宿縁を慶びたもうた方であった。

率直に言えば、浄土真宗における、宿善無宿善の教義は、血気にはやる若氣の日に、あまり好ましいものではなかった。だれをでも、念仏道に引き入れようと思えば引き入れ得るものであり、誰でも本気にさえなれば信心を頂くことができると思えた方が、真実で広いようである。宿善無宿善ということは、なんだか、不自由な狭い世界のようない気がしてならなかった。

しかしそれは、真実に念仏の世界がわかつていかなかったのである。その時はたして、真実教を聞信し念仏の世界に出されたことに、深い歎びや感銘があつたであらうか。

世には人さえ見れば、これに對して、法を説こうとする人がある。はたしてこの人によつて真の念仏行者ができ、また法が繁昌したであらうか。

われらは、無宿善の人に法を説くべからずと厳しく誠められた上人の世に、一宗が未曾有の繁昌をとげたことに、不可思議の感銘をおぼゆるものである。

一宗の安危を一身に荷負い、あらゆる辛酸をなめつくし、多くの人に接して勸化の難さを知り、しかも自らは真実に信心歓喜せられた上人の、深い信心の智慧から出た誠めなのではあるまいか。

人生の現実に試練せられた智慧のみが、人生の真実を知る。

いかに美しい言葉や思想でも、それが人間の錯覚や幻想が生み出したもので、大地の真相でないならば、それから尊い何ものも生まれはしない。

「或はまた仏法聴聞のためにとて人数多く集りたらん時も、この人数の中に於て若し無宿善の機やあらんと思ひて、一流真実の法義を沙汰すべからざるところに、近代人々の勸化する為体を見及ぶに、この覚悟はなく、唯何れの機なりともよく勸化せば、などか当流の安心に基かざらんやうに思ひはんべりき、是れあやまりと知るべし。」(御文章四ノ五)

氣に入つても入らなくても、正しい智慧に映じた、ほんとうの事実である。

宿善の問題が、われらを深い深い内観へとつれてゆく。

私は現に念仏している。そして難中之難無過斯難の経を日夜頂いている。何と云うありがたいことであらう。

『蓮如上人遺徳記』に、上人の念仏の世界の風光を綴つて言わく、

「又仏恩の高大なること、迷廬八万の嶺(須弥山のこと、高さ八万由旬なれば、迷廬八万という)にこえ、師徳の深厚なること、蒼海三千の底より過ぎたり。故に仏祖の恩徳の深き事をおもふに、或は食味に向へば、かれを食する毎に憶し、或は一衣を受るにも是を著する毎に念ず。然れば則ち昼夜不断、是を忘れずと言へり、又常にのたまはく、聖人の御恩徳をば、夜は夢に見、昼は聊かも忘れずと仰事ありけり。その夜に通宵(よますがら)寝程(いぬるほど)の呼吸、しかしながら念仏の声なりと云々。しかれば権化の再誕たる英聖、猶爾なり、況やわれら迷倒の凡愚に於てをや。いよいよその恩徳を重じ、報謝の志を専にすべきものをや。」

感謝か、慚愧か、全身ただ剣を呑むがごとし。念仏。

聞かれる日に真に聞け。
申される日に真に申せ。

「一。一度のちかひが一期(一生のこと)の誓なり。一度のたしなみが一期の嗜なり。そのまま命終れば一期の誓になるによりてなり。」

「二。今日ばかり思ふ心を忘るなよ、然なきはいとどのぞみおほきに。覚如様御歌」
(御一代聞書)

聞ける日に真に聞け。そして今日一日念仏に生かされよ。

「でもこれほどの我儘者をも、先生は毎日心ひそかに待つてみて下さいましたこと
でございませうに申しわけないことござりました。公務も一段落ついたと思ふ二
日の日、直後から近隣の疫病続出にて、急帰して其の手伝いに行きました。夜中の十
一時過ぎ、二三の灯に守られて焼場にと担がれてゆく痛々しいお葬式をも拝見致しま
した。その混雑中に父が発熱、二日おきまして妹も又発熱、父は間もなく治りました
が……ところがまたその小さい弟が発熱、これも又伝染性にて、御聖会中、私は殆
んど不眠不休の看護を致しまして、やつと今日頃から皆床から離れるやうになりまし
た。ついこの間まで、『夏の聖会がある』と思ひきつてゐた事が事実の上に全然否定さ
れてしまつて、本当に私の宿業の深きことをつくづく感じさせていただきました。
……この度は、田舎に入つてからの私の楽しみの講習だったので、猶残念です。夏³
の聖会、夏の聖会と心ひそかにつぶやいては、そつとまたしまい込んで、お待ちして
みました。荷物のトランクだけは……」

こうした悲しみに泣いた人が、一人や二人きりであろうか。

トランクを前にして、どうしても出て来られなかつた人の中、台湾の某氏へ、私が
再び台湾へ行くからとの電報を打つた方がある、その返電に言わく、

「ミナトナへ センセイゴライダイノコト ミナサマノトウトイオスガタヲ シノ
ビツツ アツクオレイマウシマス」

いつの世、いずれの処にも、こうした歎きがあるう。

このたびの聖会に列席することを堅く約束しつつ、充員召集に会い、軍服姿のまま
でわずか一席の講演に列して、念仏しつつ泣いて出征した同胞の相。

聞ける日に真に聞け。聞けた日を真に飲べ。一期一会。

そして今日一日仏恩に生きよ。聞こうときえ思えば聞けるのではない。

三日間の大経講座、今一席で済む日の夕方、弟が自転車で足を折つて、一番中心で
あるはずの中務夫妻が、福山に急ぐ。

聞ける時、真に聞け。

しかし、聞かれない時、その悲しみの中に、何を考えたか。何をしたか。

もし、仏教が単なる哲学なら、学問なら、一席ぬけても大変である。しかし仏教は、

「それ八万の法蔵を知るといふとも後世を知らざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも後世を知るを智者とすと言へり」と。

「他宗には法にあひたるを宿縁といふ。当流には信をとる事を宿善といふ。」

腹の空いた野良犬が食をあさつて歩いてゐる。腹を痛めた子が、何をやつても食わない。出ようとて出られぬ時、悲観してばかりいてよかろうか、会われぬ日、損をせぬ人が、会うだ日に損をせぬ人である。

せつかく列席しても何も得ずに帰る人がある。悲しむべし。傷むべし。

上人言わく、

「このごろ真宗の念仏者と号する中に真に心底より当流の安心決定なきあひだ、或は名聞、或はひとなみに報謝を致すよしの風情これあり、もつての外然るべからざる次第なり。その故は既に万里の遠路を凌ぎ、莫大の辛勞をいたして上洛のともがら、徒らに名聞ひとなみの心中に住すること口惜しき次第にあらずや。頗る不足の所存と謂ひつべし。ただし、無宿善の機に至りては力及ばず、然りと雖も無二の懺悔をいたし、一心の正念に赴かば、いかでか聖人の御本意に達せざらんものをや。」

名聞会座に坐して何も何も得ず。名聞と知らずして、錦を泥足によつてふみにじり、幻を彼方に追うて、今日を泥土に委す。無二の懺悔なきかぎり、一期一会の感激あることなく、如来聖人の大信海に同ずる日あることなし。

仏教者に明日なし。